

## 〈はじめに〉

最近、以前にくらべて好きなものが増えました。昔から、人があまり興味がないものに心魅かれてしまう傾向は持っていたのですが、このところ加速度的にいろいろなものを好きになり、そのことに少し驚いています。なぜ、そのように変わってきたのかと考えてみたのですが、2つ、思い当たることがありました。

ひとつは、今回のような学習会を始めたことと関係があるのでは、という点です。学習会の開催を続けて行くにつれ、さまざまなことを、自分なりに考えることが多くなりました。大げさに言えば、つねに心に何か引っ掛かり、自問自答を繰り返しています。学習会では、これまで異なるジャンルの事柄をテーマとして、内容を考えてきましたが、回を重ねているうちに、結局、どのテーマであれ、核になる部分、すなわち具体的なものを取り去った物事の仕組みの部分は、共通していることに気がつきました。テーマは違っていても、コード進行が同じひとつの曲を、毎回アレンジして演奏しているだけのようなのです。そして、その曲というのがきくと、自分なりに現時点で捉えている、人間や社会のスキーマなのだと思います。スキーマとは、何かを認識するための知識の枠組みです。その枠組みでものを眺めると、どんなものにも、まるで箱庭のように、小さな“世界”をのぞき見ることができます。そしてそれは、自分にとってとても楽しい営みです。学習会をきっかけとして、自分なりのスキーマを磨いたことが、それまで無関心だったものに目を向け、好きになることにつながっている、というのがひとつの考えです。◆もうひとつは、時代や社会の変化があげられます。最近、世の中自体が、さまざまな事柄の中に小さな発見を見出し、それを楽しもうという風潮が強くなりました。以前は、変わり者・おたくとして、集団の中で胡散臭がられていた人々が、いまは専門家・マニアとして評価されるようになっていきます。さまざまなスキーマを提供してくれる魅力的な物(昔はがらくた)を、日常的にテレビや雑誌で知る機会も多くなりました。このような変化は日本にとどまらず世界的な広がりを見せていますが、ITによる情報の浸透が、世界の多様さを伝え、また同時に、すべてに共通する枠組みや仕掛けに、みんなが関心を持ち始めているのではないかと思います。◆今回は、発達障害の強い子どもをテーマにした学習会ですが、「自分を通して考えてみる」ということをひとつの方法としました。自己表現の乏しい障害の強い子どもを考えると、同じ人間として、自分だったらどうか、と考えることが必要なのではないかと思ったからです。学びの中でスキーマを得ることが、自分にとって最大の娯楽であるとすれば、もしかしたら、子どもにとっても、同じことが言えるのではないか。基礎的学習で得る知識や能力が、実用や実益とは別に、「楽しさ」を提供するものであってくれば、と思います。◆ときどき、もしかしたら私たちは、幼い日々、スキーマを獲得しながら世界を切り拓いて行ったときの感動や興奮を忘れてしまっているのではないか、と思うことがあります。そして、いま自分が学んだり考えたりしていることは、その頃、直感的に知っていた世界の姿を、もう一度見ようとしているのではないか、とも思います。人間が、無意識に、道なりに、知ったものを、あとから意識的に知ることは、たぶん不可能なことでしょう。でも、遅れの強い子どもとのやりとりの中で、ふと、その瞬間が垣間見られたような気がするときがあります。以前にはできなかった行動が、いつしか獲得され「できている行動」になっているのに気づくとき、その変化の瞬間を、自分自身が追体験したかのような感覚に陥ります。それは妄想にすぎないかもしれませんが、子どもたちが自分に提供してくれるものを、少しずつ拾い集めて行こうと思っています。